

発行責任者

稲生正勝

横浜市東区白百合2-6-4
〒245 TEL.045-811-4404



都島だより
KANTO NANIWA KOGYOKAI
NEWS

KOGYOKAI

投稿送り先
石川芳夫

千葉市中田町1193-13高根グリーンタウン37-12
〒280-01 TEL.0472-28-2102

2 関東浪速工業会
会報

編集委員 電気=笹本克己 (S13卒) 田中己晴 (S43卒) ・土木=秋月勝美 (S18卒) 榎本嘉信 (S20卒) ・建築=若林衛 (S36卒) 西口勝臣 (S47卒)
工化=松井駒治 (S32卒) 柴田孝次 (S34卒) ・機械=福岡照夫 (S26卒) 橋本健治 (S28卒) 石川芳夫 (S34卒)

『五十年後の都工に集いて』

昭和十四年電卒 島 節雄

昭和十四年三月母校を巣立って早や半世紀が経過する平成元年六月七日に「卒業五十年記念の祝典」を挙行するとの案内がきた。卒業後関東地方居住に徹し、殆ど都工の校門をくぐった記憶を持たない私にとって学校がどう変わったかの興味と共に級友の誰彼に会えることを楽しみに参加した。

六月七日は真夏を思わせる炎暑で地下鉄都島駅から街角に出た途端の日差しが痛く感じられた。母校が地下鉄出口に隣接、古色蒼然と所在していたのには驚きと共に懐旧の情一入であった。東通門から入る、正面が体育館で一階右に柔道場、その反対側に剣道場がある。双方共静寂の中にあり勿論なつかしい汗の臭いなど漂ってくる訳もない。右手に戦前の建物が残っていて都二工の校舎になっている。左方一期本館の教務室を訪ね蔵敷教頭にお会いした。目下本館の左半分が改築中で旧講堂や正面玄関ならびに臨校記念碑は防護ネットに囲まれている。本館四階の祝賀会場に入るやヤアヤアの掛け声が颯風の如く飛び来り、彼方此方の笑顔に心癒される。



大阪市立都島工業高等学校 旧本館



新本館建て替え工事中

『昭土会の皆様にお知らせ』

とお願い

昭和18年土卒 秋月 勝美
土木科卒業の皆様にはご健闘にてご活躍されておられることと存じます。昭土会関東支部はご承知の通り稲池会長と、世話役の吉田幹事が大阪に転勤され

会長不在のため、ここ数年総会は開催されていませんが、既に土木科担当(昭62年度)の関東浪速工業会会長には太田清氏(18年卒)をお願いしその大任を果たされ、事実上同氏を昭土会関東支部会長として毎年開催される関東浪速工業会の総会をもってこれに替えさせていただきます。この次第です。

出席：機械科 十七名 建築科 九名
電気科 十六名 土木科 七名 合計 四十九名

祝典は午前10時開始、記念館・各科別館の見学を経て昼食懇談後、午後一時過ぎに閉会。この間の式次第は省略させて頂くが、若干の話題と感想を述べたい。

まず、級友田辺博明君のことだが卒業以来五十年近く母校への返信全くなし、工業会名簿一九八九年版以前のものは全て死亡欄に記載されていた。まさか死人が出席する筈もなくさっぱり見たこともない男が座っている、誰だ誰だと言いつつ交わしているうちに当人から釈明があつて幽霊でないことが分かり五十年祝賀、死せる田辺を蘇らせたか一同大笑い。

電気科長の案内で別館に行つた際、作業中の生徒から「オス」と挨拶された。我々往年の悪童連は期待していなかっただけに大変嬉しく返答したことであつた。彼等が先輩の姿に五十年後の己をどう認識したか興味深い。

プールもなく土俵もなく臨時校舎の蚕食故に狭苦しくて変化のない校庭で運動する生徒達の哀れさを想う、勿論新校舎完成までの我慢と思うが、電気科別館に設置されている実験用具や工作機械に大正、昭和初期のものが少なくない。工作機械など我々の時代は平ベルトの集合運転だったが現在も進化していない、佐々木さんと園田さんが前に立って怪しくもない。

近代産業やハイテク社会に人材を送り込む可き都工が、予算欠乏故に今の電気設備技術基準からも問題視される旧式用具を当てがってよとするのか。探しても直付OCBの手動式配電盤など底辺企業すら持ち合わせていないだろう。容器(建物)の見映えも必要なしとしないが、矢張り近代産業にマッチする設備の内容充実が先決だと思ふ。兎に角、建物にこだわらず用具の更新が望ましい。

昼食時自己紹介、生と死の間を生き貫いた感想が殆どであった。祝典後各グループとも記念撮影を終え尽きない名残を惜しみつつ京都へ、奈良へと旅立って行つた、我々も北の太融寺で野中先生や野口君等物故者慰霊の祭祀を行い、今夜の宿である有馬へと出発した。

(追記)和田理事長、石井評議員長から関東支部各位へ宜しくとの伝声あり。

今年も十一月頃開催される予定ですがその節は多数の御出席をお願い致します。また、関東浪速工業会の行事につきましても土木卒業の参加者が少なく、いつも同じ顔ぶれの小人数で幹事一同肩身の狭い思いをしております。これからは特に若い人達の参加をお願い致します。

同級生がいらないからつまらないとか、おじん達はかりで「けぶたい」とかいう気持ちで捨てて勇気を奮って、暇をつくって参加してください。また、当会報「都島だより」への投稿もどしどしお送り下さい。

現在の昭土会関東支部会員の人数は、関東在住者 約六十名 この内連絡のとれる人(当会報郵送) 三十名。
昭和35年機卒 中川 英三

都島本通り

昨年五月の連休に二十数年振りに都工を訪問した。私が都工を卒業した昭和35年にバレーボール部のコーチとして赴任された故村上先生の十三回忌法要の出席にあわせ、現在の都工の在りし姿を見ておきたかったためである。▽現在は新校舎建設中で本館の一部が壊されていたが、玄関・教員室等昔のままであった。▽二十九年前に入学した上級生に教室の周りをぐるりと固められ、伝統ある都工の先輩・後輩のケジメ等の説教をされたこと。

◎体育祭の応援練習のためと称して、校舎屋上に正座させられタツプリと校られたこと。
◎自分達の手で実習工場横の空き地に自動車運転練習場を作ったこと。(現在は無くなくなっているが...) 等等、様々なことが思い出され感無量であった。▽バレー部の後輩達との懇親会のと都島本通りから桜宮駅まで三年間通い慣れた道を思い出しながら歩いてみた。家並みはあまり変わっていないにも拘らずこの方向であったと思ふ所に駅は見当たらず、自分の記憶力の悪さと、余りにも永く大阪を離れ過ぎていたことを痛感した。▽一昨年十一月初めて関東浪速工業会懇談会に出席し多数の先輩諸兄と懇談した。私なんかまだまだ「若僧」であり今後共ますます切磋琢磨せねばと大いに感じた。

昔の楽々つ張り

昭和3年建卒 菅原 肇
私が予科の二年生。まだ校舍が梅田駅の裏手にあった大正十二年の古い話である。

当時の中学生は並べて黒い制服に白いゲートルを穿いて通学していたが、この年隣の北野中学でゲートル廃止に踏み切った。これが忽ちわが市工(都工の前身)生にも波及して学校当局を動かし「教練の時以外は必ずしもゲートル着用には及ばず」と云うお触れが出た。それ以来誰もゲートル姿で登校する者はなくなり、相変わらずゲートルを着けて通っていたのは意地っ張りの私だけになってしまった。ところが毎年恒例の御陵参拜の日。全校生が校旗を先頭に四

列縦隊で整々と校門を出たところ、長列の中に入った一人私の白いゲートル姿が甚だしく目立ってしまったらしい。

先頭から駆け戻ってきた体操のカンテキ先生「尊名を失念にいきなり「ゲートルを外せ」と怒鳴られた。然し私は「ゲートルをしてはならないとは聞いていません」と突っ撥ねて率直には譲らなかつた。意外な抵抗に合つて手を焼いた先生は遂に「話は後で聴く、今は兎も角外してくれ、たのむ」と折れて、この場は一応先生に従った。

後日この先生に懇々と諭されて私も我を折り、漸く市工から最後のゲートル姿が消えることになった。今想えば当時の私は全く可愛げのないガキだった。ただそれ以来カンテキ先生と私の間には垣がなくなっていた。

「トーチカ」の思い出

昭和18年土卒 大倉 肇
不幸な戦争へと急斜面を駆け落ちるような時代に都工に在籍した私の思い出の中に、今から考えるとそれ程の不満がなかったのも不思議なくらいである。純真かつ、未熟だったせいであるうか。

軍事教練の時間は軍服の諸先生にかなりしごかれたが、その後、軍学校に進んだ私にとって嫌なものではなく何よりも学業成績に採点されない気楽さがあった。『敵は前方の〇〇〇、撃て!』、そして校庭をほふく前進といった訓練が毎回繰り返されているうち、誰言うともなく「トーチカを造ろう」ということになり、梅本中尉のご指導を受け土木実習用のセメントの無心を言つて、石灰を混ぜて量を



当時の校旗

増やし校庭の東北隅の土木校舎の近くに2段四方で高さ2段位の異様なものを造り上げた。内部に二人位入ることもでき、銃眼もあつてまずまずの出来と云う評価で、以来、校庭に鎮座して教練の際の敵目標として私達現象を誘発したのをポジティブにゲーム化したのである。

私と都工

昭和26年機卒 木下 保政
卒業して早や38年、在学時の思い出はず、入学当初の学友は大阪市の戦災により分散し、入学から終戦までの4カ月で欠けた者が多い。校舎も戦災を受け木造校舎は全焼、運動場は焼夷弾の林と化し、学校近辺には被災死者が多数散乱していた。

今では想像もつかない悲惨な光景であった。また、通学しても空襲が度々あり授業も無く、電車は降り徒歩で帰宅したことも度々あった。終戦直後は戦災復興の一助として焼けたトタン板の回収作業のボランティアに参加した。その後、授業が再開されたが教科書は今の新聞紙と同じ用紙で作

を考え出すことは今も昔も変わりはない。二年生のころだったか、放屁のコンペが盛んであつた。一日の放屁数を競いまた、連続数を誇るたぐいでY君など数十回の細切れ放屁を特技とした。当時の食料事情がこの生理現象を誘発したのである。そんな或る日のこと、漢文の時間だったかと思う。授業時間も終わりに近づいたころ尻が出そうになったので、つい一瞬力んだら自分でもびっくりする程の大きいのが一発。黙つてうつ向いていると、先生は軽妙にも「匂いがまわらないうちに帰ろう」と五分位早く退室され、教室内は笑いのどよめきとなつた。「かおる」という私の名前はこの事件と全く関わりが無いことを付け加え、五十年前のお詫びとします。

「都島区毛馬町育ち」

昭和51年土卒 吉岡 善則
都工に入学を希望するきつかけは都島区毛馬町の出身であり多くの良き先輩達の話の子供の頃からよく聞かされていた為である。私が入学する数年前に教育制度が変わり学区制が導入され、普通高校への入学は区域が限定されていた。しかし、工業高校・商業高校については区域の指定がなく、当時吹田市に住んでいたが運良く都工に入学できた。

入学と同時に真新しい学生帽と詰め襟を着て貰い、恥ずかしいようでも、うれしいうちに帰るの通学であった。JR吹田駅から大阪駅経由環状線線ノ宮駅下車右手に光を失ったネオン街の看板を見ながら淀川貨物駅の線路沿いを歩き、踏み切を渡つて

俳句

6月24、25日都工東西合同懇親会での信濃路バスツアーにて詠まれた。
山梨も 北の外れの 栗の花 (小川 玉泉)
朝涼し 諏訪湖全周 見渡せて (同)
旅人に 信濃の植田 そよぶかな (同)
六月の 蛸蛸を散らして 信濃の田 (同)
林檎はや 薄くれなるに 湖の風 (同)
緑蔭の 御手洗に湯を 諏訪大社 (同)
※ 蛸蛸おたまじゃくしの意

第2回舎會コンペ

昭和32年工化卒 佐々江延宣
下手な横好きで今年七・八月に七回もゴルフに出掛けた。炎天下で身体を鍛えておこうとの考えもあり一生懸命だったが、残念ながら五十才の年令では若干バテ気味と云うところで。さて、去る八月二十四日に工業化学の同窓会である舎會会の第二回ゴルフコンペ(能勢カントリークラブに於いて)が開かれ、関東から二名(昭和33年工化卒西村一夫君と佐々江)を含め十四名が参加した。

路地を抜けて登校した。在学中の夏休みに先輩のお世話で市役所の測量のアルバイト兼実習を行なはせて頂いた。卒業にはテーマが与えられ「防壁の設計」を行った。これには半年間の期間があったが思うように進まず大変苦労した。当時の担任は岩村先生でよく「歯をくいしばれ!」の一言と共に大きな手が飛んできた。今では懐かしい良き思い出のひとつである。あの時の身にしみ入るご指導がなかったら今の私は無い。大阪を離れ十二年、今も私の本籍は都島を離れられない。

編集後記

△:戦争あり、戦後の社会混乱、経済の激動の時代をくぐつて来られた歴戦の勇士が卒業五十年記念祝典に集われ、さぞ、文字に表せられない感激をされたことでしょう。日本人の寿命が伸びたとは云え、四十九人もお元気で参加されたことに驚きと尊敬の気持ちでいます。▽:株式会社の中間決算ではないが、出来ることなら卒業二十五年か三十年の集いを呼び掛けて、人生の中間報告会を開かれたら幽霊との再会も少なくなり、また、浪速工業会の活性化にも役立つと共に、個人々々への励ましにもなるのではないかとと思われまふ。(福岡 照夫)